名古屋芸術大学研究紀要第37巻　213～229頁（2016）

ピアノ学習者の為に必要な作曲家の生い立ちとその歴史

Composer's Personal History for Piano Learner

谷口　龍博　*Tatsuhiro Taniguchi*
（音楽学部）

序

多くのピアノ学習者に必要と思われる重要な作曲家の生い立ちとその歴史を概括的に記した。

ピアノを弾くという事は楽譜に囚われ、その技術を習得するために多くの時間と労力が費やされるが、半面その時に作られた曲の作曲家の思い、立場、時代背景等を知ることは少ない。素晴らしい数多くの曲を我々に残してくれた偉大な作曲家達は、どのような人生を送ったのか？　音楽史上、燦然と輝き名を残した人達だからきっと幸せな生活を送っていたに違いないと勝手に思い込みがちだが、翌々調べると、両親との死別、経済的困窮、健康上の不安、様々な人間関係のトラブル等と、その苦労が伺える。

歴史上に名を残した音楽家は数多くいるが、スカルラッティ、バッハ、ヘンデル、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、ウェーバー、シューベルト、メンデルスゾーン、ショパン、シューマン、リスト、ワーグナー、ブラームス、サン・サーンス、ムソルグスキー、チャイコフスキー、ドボルザーク、グリーグ、フォーレ、ドビュッシー、スクリャービン、ラフマニノフ、シェーンベルク、ラヴェル、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、ショスタコーヴィチ、他枚挙に暇がないが、今回はピアノを学ぶ上で最低限必要と思われる作曲家の生い立ちと簡単な歴史を知ることによって、ピアノ学習者に少しでも参考になればと思います。

バッハ

先ずは音楽の父と称されるヨハン・セバスチャン・バッハ Johann Sebastian Bach（1685～1750）から記したいと思う。

バッハは旧東ドイツのアイゼナッハという町で音楽の一族の元に生まれた。子供の頃から町の楽師であった父から音楽教育を受けるが、８歳の時に母親を、９歳の時に父親を相次いで亡くし孤児となったバッハは、15歳の頃ドイツの北の町リューネブルクの聖ミカエル教会の学校の給費生として音楽の勉強をした。

18歳の時、故郷アイゼナッハに近いアルンシュタットという町で教会のオルガニストを務めていたが、ハンブルグより北のリューベックの聖マリア教会で当時高名であったブクステフーデのオルガンを聴く為に、アルンシュタットから徒歩で400km 近くの道のり

を歩いたというエピソードがある。

この時の影響を大きく受けて出来たのが彼の名曲「トッカータとフーガ（ニ短調）」である。

その後、ミュールハウゼンのオルガニストを１年余りで辞し、23歳頃からヴァイマールのオルガニストを務め、この時期に多くのオルガン曲を創作した。後に宮廷の楽師長に任命され、バッハの名声は急速に広まった。

1717年、バッハが32歳の時ケーテンの宮廷楽長として赴任し、音楽に理解のあったレオポルド公に優遇され、高価であったチェンバロを購入し、クラヴィーアの為の「インベンション・シンフォニア」、「フランス組曲」、「イギリス組曲」、「平均律クラヴィーア曲集 第１巻」、「アンナ・マグダレーナ・バッハの為のクラヴィーア小曲集」、「ブランデンブルク協奏曲」他、多くの器楽曲が作られた。この時期の事をバッハ自身が「我が生涯最良の時代」と語ったと言われる。

それから６年後、ライプツィヒの聖トーマス教会の合唱長に就任した。この時期にバッハの名はドイツ全土に広まった。彼の「ゴールドベルク変奏曲」、「平均律クラヴィーア曲集 第２巻」、100曲以上の「カンタータ」、「マタイ受難曲」、未完となった「フーガの技法」等が作られた。

しかし徐々に若い世代から、バッハの作品は時代遅れで退屈なもの、難解なものと思われるようになり、バッハの死後彼の名は作品と共に急速に忘れ去られた。

後年、R. シューマンが出版した「新音楽時報」によると、「ライプツィヒのバッハの墓を訪ねたが、誰も解らなかった。」と述べている。

しかし、モーツァルトはバッハの息子であるヨハン・クリスチャン・バッハ（通称、ロンドンのバッハ）にイギリスで会い大きな影響を受け、ベートーヴェンは「バッハは小川（Bach の訳）ではなく Meer（大海）だ。」と述べ、ショパンはバッハとモーツァルトを一番尊敬し、演奏会の前はいつもバッハの平均律クラヴィーア曲集を弾いていたという。又メンデルスゾーンが「マタイ受難曲」を演奏し、シューマンが「新音楽時報」でその芸術的価値とバッハの名声を世に広め、その名を不動のものとした。

現代では、インベンション、シンフォニア、平均律クラヴィーア曲集 第１巻・第２巻、イギリス組曲、フランス組曲と学習者必須の作品群である。

モーツァルト

続いて神童と呼ばれたウォルフガンク・アマデウス・モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart（1756～1791）を記したいと思う。モーツァルトはオーストリア（当時はドイツ領）のザルツブルグに生まれ、ザルツブルグ大聖堂で洗礼を受けた。モーツァルトの生家は現在博物館となりバイオリン、小さな箱型のスクエアピアノ、肖像画等が展示されている。

モーツァルトは4歳の頃から作曲を始め、息子の才能を見抜いた父レオポルドはモーツァルトが6歳の頃よりミュンヘン、ウィーン、パリ、ロンドン、マンハイム、ローマとヨーロッパ中を息子の就職先を求めて何度も馬車で旅をした。

当時の音楽家の就職先といえば宮廷の音楽家か、教会のオルガニスト位だった。モーツァルトは行く先々で作曲、演奏活動をし、大成功を収め神童ぶりを発揮したが、残念ながら良い仕事先は見つからなかった。

その時期の楽しかった事、自身が病気になった事、作曲の事等様々な事が200通を超す「モーツァルトの手紙」（柴田治三郎　編訳）を読むと良く理解できる。中でも、モーツァルトが22歳の時、同行していた最愛の母親がパリで亡くなり、その時作曲されたのがK. 310の通称「パリソナタ」である。

モーツァルトの作品の多くがDur（長調）であるのに対して、数少ないmoll（短調）のこの曲は、その慟哭の悲しみが綴られている。この曲の第1楽章の中間部では初めてffが書かれており、この時代はチェンバロからフォルテピアノに移行する時期で、やっとfとpが弾き分ける事が出来る程度であり、恐らく表現できなかったであろうと思われるffを書いたという事はその悲しみの深さが伺い知れる。

母の死後、ザルツブルグの狭い田舎暮らしに不満を抱いていたモーツァルトは4度目のウィーンへ旅立つが、当時の大司教との不和で宮廷の仕事を辞し、フリーの音楽家として独立しウィーンに定住する。

この25歳～35歳までの10年間が数々の傑作を生みだし、モーツァルトの名を不動のものにした時期である。

17のピアノ協奏曲、オペラ「フィガロの結婚」、「ドン・ジョバンニ」、「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」、そして「ジュピター」を含む3大交響曲「K. 543」「K. 550」「K. 551」（モーツァルトはこの3大交響曲を僅か6週間で書き上げたというのは驚異である。）、ピアノ曲では幻想曲「K. 475」や5つのソナタと作品の充実ぶりが伺えるが、それと逆行するように経済的困窮と健康を蝕まれ、最後の作品となった名作オペラ「魔笛」、そして未完となった「レクイエム」が自分の為の曲となった事は余りにも皮肉な事であり、僅か35歳で逝ってしまった事はまさに天才薄命の代名詞である。その短い生涯の中で700曲以上の作品を残し、交響曲、協奏曲、室内楽曲、オペラ、歌曲、器楽曲、宗教曲と幅広い分野で数々の名曲を残した。

ピアノ曲も多数ありソナタ、変奏曲、ロンド他とあるが、ソナタはザルツブルグ、ミュンヘン、マンハイム、パリ、ウィーンと各地で書かれた曲に大別され、学習者は数多くの曲を学ぶべきである。

ベートーヴェン

次に、音楽史上最高の巨匠と言える楽聖ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven（1770～1827）について記したい。

ピアノ学習者にとっても音楽家にとっても、又世界中の人々にその名を轟かせたベートーヴェンは、ドイツのボンに生まれた。子供の頃は宮廷の歌手であった父親にピアノのスパルタ教育を受けた。19歳で母親を、22歳で父親を亡くすが、リヒノスキー伯爵、ワルトシュタイン伯爵等の支援によって、当時ウィーンで高名であったハイドンや、サリエリに作曲を習った。

その作風は独創的であり、ソナタ形式の確立という偉業を成し遂げた。32のピアノソナタは学習者にとって必須の作品であり、彼の「月光」「悲愴」「熱情」と呼ばれる三大ソナタ、「テンペスト」「ワルトシュタイン」「田園」「告別」など数々の名曲を残した。

しかしこれらの標題はベートーヴェン自身が付けたのは非常に少なく「悲愴」と「告別」だけである。「月光」はベートーヴェンが「幻想風ソナタ」と名付け、「熱情」は出版社が勝手に付けたものである。

「告別」はベートーヴェンの支援者であり弟子であったルドルフ大公との別れを惜しんで書かれた曲である。第１楽章「告別」、第２楽章「不在」、第３楽章「再会」、とそれぞれの楽章に標題が書かれており、これはベートーヴェンにとって特別な事であり、他に例を見ない。

では、「悲愴」を意味するものとは何か？

私の師である属澄江先生の夫君、属啓成先生が30年以上も前に日本語訳と共に出版された『ハイリゲンシュタットの遺書』を読むと良く理解できる。

ベートーヴェンは難聴に苦しみ、1802年10月、32歳の時に死を決意した。その時の短銃をウィーン郊外の地、ハイリゲンシュタットで私も見た記憶がある。

ベートーヴェンの苦しみはどれほどのものであったか……。

「悲愴」が書かれたのは28歳の頃である。既にそれ以前から耳の病は始まっていた。

この書によると遺書が書かれた６年前、彼が26歳の頃から難聴が始まったと記されている。

あの偉大な音楽家が「耳が聴こえない」などとは考えられない。ベートーヴェンはこの事を数名の親しい人物だけに打ち明け、後はひた隠しにしたと言われている。

この地獄のような苦しみを既の所で自殺を思い留まらせたのは、音楽の力だった。

ベートーヴェン自身の言葉によると「遠方から響いてくる笛が聞こえ、自分にその音が聞こえなかった時、或は羊飼いのうたう歌が人には聞こえて自分にはこれも聞こえなかった時、こんな出来事は僕を全く絶望に導いたのだ。それはしばしばあった事で、この命を絶とうと考えてみるのであったが、ただ芸術だけが自分を人生に連れ戻してくれるのであった。僕は自分に課せられた仕事を完成するまでは、この世を捨てることは出来ないような気がした。」[1)]（原文のまま）

これはまさに神が与えた試練であり、ベートーヴェンはこの絶望的な苦難を乗り越え、

この後「傑作の森」と言われる数年を含む「英雄の時代」と呼ばれる10年間、創作意欲が爆発したように素晴らしい作品を作り続け、世界的な大音楽家になったのである。

「第九」を始めとする９つの交響曲、協奏曲、宗教曲、序曲、歌劇、歌曲、合唱曲、弦楽四重奏曲、器楽曲、他数多くの優れた作品群を世に残した。

また、ピアノ学習者にとって必須の32のピアノソナタ、変奏曲、ロンド、バガテル等があるが、何といっても数多いソナタを沢山学ぶべきである。

ショパン

ピアノを学ぶ人達にとって最も憧れ、重要な作曲家であると思われるフレデリック・フランソワーズ・ショパン Frederic Francois Chopin（1810～1849）について記してみたいと思う。

ショパンはフランス人の父とポーランド人の母との間に生まれ、７歳で作曲を始め、同年演奏会を行った。16歳でワルシャワ音楽院に入学し、３年後に首席で卒業しウィーンにて演奏会を行った。

20歳の頃、自国ポーランドで３回のコンサートを開き、１，２回目は自作のヘ短調の協奏曲、３回目はホ短調の協奏曲を演奏し大喝采を浴び、モーツァルトの再来と言われた。

自国ポーランドでは教えることが無いと言われ、音楽の都ウィーンへ旅立った。

しかし当時ウィーンはヨハン・シュトラウスのワルツが全盛の時であり、ショパンはあまり評価されず、又政治的にはポーランドはロシアに攻め込まれ消滅の危機にあり、愛国心の強かったショパンはポーランドに好意的でなかったウィーンを１年足らずで離れ、ミュンヘンを経由してパリに移り住んだ。

パリでは、大きな演奏会が好きではなく、又病弱で体力的にも恵まれなかったショパンは社交界のサロンでの演奏会の寵児となった。そこではリスト、ベルリオーズ、メンデルスゾーン等と親交を結び、華麗な生活を送った。しかしショパン自身は何度も病に倒れ、健康状態が悪化するに加え、パリでは暴動や伝染病の恐怖も流布している最中、多くの弟子を取り、教育することに力を注いだ。

1835年25歳の時、両親がポーランドからボヘミアのカルロヴィ・ヴァリという温泉地に療養に来ることになり、ショパンはパリから馬車で駆け付けた。これが両親との最後の別れとなった。その帰路、ライプツィヒでメンデルスゾーンやシューマンとクララに会った。それから３年後、ジョルジュ・サンドと出会いスペインのマジョルカ島やノアーンへの旅を繰り返す中で、数々の曲を作った。

33歳の時、父親の死を知って精神的にダメージを負うが、姉のルドヴィカがワルシャワからパリに来て再会を果たした。

晩年、パリのプレイエルのサロンで演奏会を開き、ショパンは絶賛されたがこれがパリでの最後の演奏会となった。その後、パリで再び暴動が起き、弟子であったスターリング

譲の誘いでイギリスに渡った。演奏会嫌いのショパンは経済的に困窮した時だけ演奏会を開いたが、「小さな音だった」という以外はいつも絶賛されたものの、ロンドン、エジンバラ、スコットランドと旅が進むにつれ、病も進行した。やっとの思いでパリに戻ったが、ヴァンドーム広場の一室で姉のルドヴィカ等に看取られて、39歳の若さで亡くなった。

ショパンが他の作曲家と大きく違う点は、一部声楽曲、チェロの曲などがあるが、殆どがピアノ曲であるということである。協奏曲、ソナタ、ワルツ、ポロネーズ、プレリュード、ノクターン、マズルカ、スケルツォ、バラード、エチュード、即興曲、ロンド他、その短い生涯の中で膨大な素晴らしいピアノ曲の作品を数多く残した。

その作風は高度な技術を要し、音楽的にも独創的で流れるような旋律の美しさ、色彩感溢れる和声の響き、転調の見事さ、構成力と多くの学習者の憧れの曲となるのも頷ける。

一例として、そのエチュードはJ. S. Bachの平均律クラヴィーア曲集が音楽の旧約聖書と例えられるのに対して音楽の新約聖書に例えられ、技術的にも音楽的にもピアニストの試金石であり生涯をかけて学ぶべき作品群である。

ショパンはこれらを20代で全部創作したというのは驚きである。

作品10の12曲はリストに捧げられたが、何でも初見で弾けたというリストが2週間パリから姿を消し、その後ショパンの前で暗譜で全曲を弾きショパンが驚いた、というエピソードも残されている。

又、彼の偉業を称え創設された5年に一度ポーランドで行われるショパンコンクールは世界的権威を持ち、世界のピアニストの登竜門となっている。

リスト

次にピアノの魔術師と呼ばれたフランツ・リスト Franz Liszt（1811～1886）について述べてみたいと思う。ショパンと並び称されるリストは1811年生まれで、前述のショパンと一歳だけ年下である。また、後述するシューマンはやはり1810年生まれでショパンと同じ年でこの年代に音楽の3人の天才が生まれたのは不思議な運命を感じる。

現在はオーストリア領であるが、当時はハンガリー領であったライディングという村に生まれたリストは、8歳の頃から演奏会を開き大成功を収め、その才能を開かせる為一家3人でウィーンに行きベートーヴェンの弟子であったツェルニーに正式にピアノを習った。

20～30代の頃は演奏家として当時のスーパースターであった。ヨーロッパ中で行われたリストの演奏会はどこでも超満員で、リストが弾くと弦が切れるだけでなくピアノ自体が壊れ、予備のピアノを用意していたそうである。

私はリストが弾いたといわれるピアノをイタリアのミラノの博物館で弾いたことがあるが、現在のような頑強なピアノではなく、チェンバロとピアノの中間のような楽器であ

り、これではパワーのあったリストであれば壊れるのも無理はないと思った。

演奏活動で莫大な収入があったリストは、水害のあった故郷ハンガリーに多額の寄付をしたり、リスト音楽院の創設に寄付をしたり、又多くの門下生に無料で教えたりした。

私の師である属澄江先生もリストの弟子の一人、エミール・フォン・ザウアーに学んだ。

ペータース版の校訂は殆どザウアーである。

30代半ば過ぎに多忙な演奏活動を止め、ドイツのワイマールで宮廷楽長となり作曲に専念した。

ショパンと大きく違う点はショパンの殆どの作品がピアノ曲であるのに対し、リストはオーケストラの作品、管弦楽曲、歌劇等もあり、特に交響詩というジャンルを作った。作品全体では1000曲を超えるが、何と言ってもピアノ曲が圧倒的に多い。

又50歳を過ぎた頃ローマに移り住み、カトリックの僧侶の資格を取り、キリスト教を題材にした作品も数多くある。

主な作品は３つの協奏曲、ソナタ、バラード、パガニーニ練習曲、超絶技巧練習曲、２つの演奏会用練習曲、３つの演奏会用練習曲、巡礼の年「第１年」「第２年」「第３年」、ハンガリー狂詩曲全19曲、２つの伝説、スペイン狂詩曲、４つのメフィストワルツ、他膨大な作品群があり、学習者はこれらを比較的易しい曲から順に学ぶと良いと思う。

シューマン

続いてドイツの作曲家ロベルト・アレクサンダー・シューマン Robert Alexander Schumann（1810～1856）について考えてみたいと思う。シューマンは旧東ドイツのザクセン州ツヴィッカウという所で生まれた。父親が家業で出版業を営んでいたせいか幼い頃からシューマンも本や音楽に親しみ、その為か後の彼の音楽にも大きな影響を与えた。

青年の頃、母親の勧めでライプツィヒやハイデルベルクの大学で法律を学び法律家を目指していたが、音楽の夢が捨てきれず、20歳の頃高名なピアニストであったフリードリッヒ・ヴィークにピアノを習い始めるが、手を痛め、ピアニストを諦める。その娘であったクララ・ヴィークと恋仲になるが父フリードリッヒの大反対に遭い裁判沙汰となるが、シューマン側が判決を勝ち取り晴れて結ばれた。

クララ・シューマンは当時の名ピアニストであり、有名なシューマンのコンチェルトを初演する等、ショパンに「私のコンチェルトが弾ける唯一のドイツ人」と言わせた。

又ブライト・コッピフ版のシューマンはクララが校訂している。

1843年、33歳の頃メンデルスゾーンが開いたライプツィヒの音楽院で作曲とピアノを教え、１年後ドレスデンに移り住み、40歳の頃デュッセルドルフの音楽監督として招かれた。

私が下宿していた所から少し離れた所にシューマンとクララが住んでいた家があり、そ

こから少し離れた所に若き日のブラームスが住んでいた。ブラームスはそこから当時名声の高かったシューマンに作曲を習いに通っていた。シューマンは若くして亡くなったが、残された作品群はやはり素晴らしいものである。

多くの作品の特徴は父親が出版業を営んでいた為か文学的な内容を持つ標題性の高いものが多い。又優れた数多くの作品群も然る事ながら、シューマンの功績の一つは「新音楽時報」という音楽雑誌を発行しその主筆となり、ブラームス、メンデルスゾーン、シューベルトなどを取り上げ世に紹介し評論や名声を高め、ドイツ音楽、特にJ. S. バッハの地位的向上の確立に努めた。

又シューマンは同じ年の為かショパンと親交があり、ショパンは2度程シューマンに会いバラード第2番Op. 38をシューマンに献呈し、シューマンはショパンにクライスレリアーナOp. 16を献呈している。

シューマンはショパンに初めて会った時、「天才だ！　脱帽したまえ」という言葉を残している。

20～30歳位までは殆どピアノ曲であったが、30歳位からは「歌曲の年」と言われ、詩人の恋、リーダークライス、女の愛と生涯等の多数の名曲を残し、翌年は「交響曲の年」と言われ、交響曲第1番「春」、等を残している。

作品は第1番「春」、第3番「ライン」を含む4つの交響曲、歌曲、合唱曲、協奏曲、室内楽曲、ピアノ曲等優れた数多くの作品があり、ピアノ曲はアベック変奏曲、パピヨン、クライスレリアーナ、謝肉祭、ウィーンの謝肉祭、幻想曲、3つのソナタ、幻想小曲集、シンフォニックエチュード等、数々の名曲を残している。

ブラームス

続いてドイツのロマン派のもう一人の重要な作曲家ヨハネス・ブラームスJohannes Brahms（1833～1897）を取り上げてみたいと思う。

ドイツの北部の港町ハンブルグで生まれ、父親からピアノの手ほどきを受け、若い頃はピアノの名手で鳴らし、20歳の頃当時の大ヴィオリニスト、ヨアヒムの紹介を受けデュッセルドルフにいたシューマンの元を訪れた。

ブラームスは初対面の時、自作のソナタOp. 1を弾き、シューマンに絶賛され「新しいドイツの希望の星」と言わしめた。又シューマンは自身が出版を始めた新音楽時報にブラームスを紹介して名を広めた。

ベートーヴェンを崇拝していたブラームスはベートーヴェンの後継者を目指し、29歳の頃ウィーンに移り住んだ。それから約10年後に19年かけて作られた交響曲第1番はハンス・フォン・ビュローに「ベートーヴェンの交響曲第10番」と言わしめた。

又、ワルツ王ヨハンシュトラウスⅡ世とも親交がありその影響を受け、連弾、2台、独奏用の16のワルツを書いている。

当時連弾が流行していた為、ハンガリー舞曲集を作りそれが大ヒットしたのだが、これはハンガリーの音楽かと思われたのだが、実際はジプシーの音楽を基に作られたものである。

出版当時、ブラームスはブラームス編曲として出版したが、同僚だったハンガリーのバイオリニスト、レメーニがこれは自分が教えたものだと主張し裁判沙汰になったが、レメーニの主張は受け入れられず、ブラームスの勝利となった。

又、ブラームスはドボルザークを見つけ出し世に広めたが、その曲がドボルザークの出世作連弾のスラブ舞曲の創作の糸口となった。

ブラームスは変奏曲の大家とも言われ、自作の主題による変奏曲、ヘンデルの主題による変奏曲、ハイドンの主題による変奏曲、パガニーニの主題による変奏曲、シューマンの主題による変奏曲等素晴らしい作品が多いが、私もハイドンの主題による変奏曲を２台ピアノで弾いたが、主題の和声と旋律の美しさ、それぞれの変奏曲の見事さ、長大な終曲のスケールの難しさとコーダのまとまりはブラームスの真骨頂と言えるだろう。

作品は４つの交響曲、序曲、歌曲、合唱曲、協奏曲、室内楽曲、宗教曲と多方面に渡り、ピアノ曲は３つのソナタ、２つのラプソディ、スケルツォ、エチュード、変奏曲、ワルツ、連弾曲、小品曲集と内容の濃い作品が多い。

ドビュッシー

次にフランスの作曲家について考えてみたいと思う。フランスも優れた作曲家を数多く輩出しているが、代表的なのは何と言ってもクロード・アシル・ドビュッシー Claude Achille Debussy（1862～1918）かと思われる。

その独特の全音階の響きは独自の和声を作り、それまでの長、短音階の世界と決別し印象派（印象主義）と呼ばれる世界を構築した。その意味では革新的である。

しかしその生い立ちはあまり詳細には知られていないがショパンの弟子にピアノを習い、10歳の若さでパリ音楽院に入学した。

在学中はピアニストを目指していたが、18歳の頃チャイコフスキーの支援者であったフォン・メック夫人の長期旅行にピアニストとして同行し、そのお陰でチャイコフスキーを始めとするロシアの作曲家の影響を大きく受けた。

22歳の時、３度目の挑戦でサン・サーンスやグノーが審査員をするローマ大賞を受賞した。

26歳の頃、初めてバイロイトに行きワーグナーを見るが、翌年再び当地を訪れてワーグナーを観劇するが、これを受け入れることが出来ずアンチ・ワグネリアンとなった。

この事はその後に作られたピアノ曲「子供の領分」全６曲の最後の曲「ゴリウォークのケークウォーク」の中間部の一節に表現されており、ワーグナーの楽劇「トリスタンとイゾルデ」の冒頭に書かれているトリスタン和音と呼ばれる導７の和音が avec une grand

émotion（大きな感激を持って）の言葉と共に書かれており譜例(1)、次に a tempo で２小節間譜例(2)と笑う場面が表わされており、これはワーグナーのトリスタンとイゾルデを嘲笑しているものと考えられ、興味深い点である。

同じフランスの作曲家、シャブリエは40歳位の頃この曲を聞き感激して、それまでの内務省の役人職を辞して音楽家になったという事と対照的である。

30歳半ば過ぎから40歳位にかけて「牧神の午後への前奏曲」、「夜想曲」、オペラ「ペレアスとメリサンド」等の成功で、作曲家としての地位と名声を確立した。

作品は、管弦楽曲「春」「牧神の午後への前奏曲」、夜想曲、オペラ「ペレアスとメリサンド」、交響詩「海」、弦楽四重奏曲、バレエ音楽、多数の歌曲と多方面に渡り、ピアノ曲は「２つのアラベスク」、「ベルガマスク組曲」、「ピアノの為に」、「版画」、「喜びの島」、「映像　第１集、第２集」、「子供の領分」、「前奏曲　第１巻、第２巻」、「12の練習曲」、他連弾曲など数々の名曲が残されている。

ラヴェル

続いてもう一人のフランスの代表的な作曲家であるジョゼフ＝モーリス・ラヴェル Joseph-Maurice Ravel（1875～1937）について述べてみたいと思う。

ラヴェルは前述のドビュッシーと時折比較され、コインの裏表と称される。

その独特な色彩感とその表現、リズムなどは我々を独自の世界に引きずりこむ。

ドビュッシーの影響も当然のごとく大きくあるが、その作風は一線を画し、旋律の美しさ、管弦楽曲の色彩感、強烈なリズム等、より鮮明な表現を大きな特徴としている。

ラヴェルの母親はバスクの生まれである。バスクは当時フランス領であったが現在はスペインの領域である独特の地である。音楽好きであった父の影響も大きくあると思うが、若い頃のラヴェルの写真を見ると黒髪に黒髭で、その風貌は殆どスペイン人に近いのではないかと思う。

あのボレロの絶え間なく流れるような小気味良いリズム譜例(3)、これはスペインの舞踏家が作ったリズムと言われる。

「亡き王女の為のパヴァーヌ」の美しく、もの悲しい旋律、これはスペインの王女マルガリータを忍んで作られた曲と言われる。

生涯スペイン好みであったラヴェルは、「スペイン組曲」等スペインにちなんだ曲が多く、スペインの血を持った人がフランスのセンスで磨かれたのではないかと思う。

ラヴェルで忘れてはならない事は、25歳の頃、ドビュッシーも取ったローマ大賞を取ろうと試み、５年間に渡り５回も挑戦したが、５回とも落選してしまった。これが有名なラヴェル事件である。

既に「亡き王女の為のパヴァーヌ」や「水の戯れ」等を発表していたラヴェルが落選したことは世間にも大きな衝撃を与えた。入選した人達は全員パリ音楽院の教授の同じ門下

生で、フォーレらが抗議し審査員が解任されフォーレがパリ音楽院の学長となった。

この件は現代でも起こり得る事であり、その先駆けとなった象徴的な出来事である。

又、ピアニストで2004年に死去したウラド・ペルル・ミュテールという人物がいるが、このピアニストはラヴェル自身に殆ど全曲を習ったということで、ラヴェル演奏の教科書と言われる人物である。ラヴェルの著作権が切れた1997年以降、日本では音楽之友社よりペルル・ミュテール氏が校訂したラヴェルの曲集が発表され、従来の著作権を持っていたデュラン社の楽譜では解らなかった多くのことを日本語訳されたラヴェル自身の貴重な言葉が添えられている。これらはラヴェルを勉強する人は必ず注意したい言葉であり、是非とも参考にしていただきたいと思う。

ラヴェルが50歳を過ぎた頃アメリカに演奏旅行に行き、各地で成功を収め、世界的に名声を高めた。

作品は管弦楽曲、室内楽曲、オペラ、声楽曲、器楽曲と多方面に渡り、ピアノ曲は亡き王女の為のパヴァーヌ、水の戯れ、ソナチネ、鏡、夜のガスパール、クープランの墓、ラ・ヴァルスとそれほど数は多くはないが、どれを取っても内容の濃い洗練された曲である。

フォーレ

もう一人フランスの作曲家で重要なピアノ曲を数多く作った人物を挙げるとすれば、ガブリエル・ユルバン・フォーレ Gabriel Urbain Fauré（1845～1924）であろう。

父親は後に師範学校の校長になった厳格な人物で、母親は貴族の出身であり、音楽家の家系に生まれたわけではなかった。フォーレは殆ど両親とは生活を共にせず、乳母に育てられた。

南仏の明るさを持ったフォーレは15歳の時、宗教音楽学校に入り10歳年上のサン・サーンスにピアノと作曲を習った。

20歳で卒業し、レンヌの教会のオルガニストになり、後にパリのマドレーヌ寺院のオルガニストになった。

1871年フォーレが26歳の時、サン・サーンス等の呼びかけでフランス国民音楽協会の設立に加わった。それは当時劇場音楽以外の作品は殆ど演奏の場がなく、無名の若い音楽家の作品を発表する為であった。

それから6年後、パリのプレイエルホールで行われた国民音楽協会の演奏会でフォーレ自身のピアノで演奏されたヴァイオリンソナタ第1番が絶賛され、サン・サーンスによって「フォーレは巨匠の域までに達した」と新聞批評に書かれた。

フォーレのピアノ演奏は非常に控えめなものであったが、長男エマニュエルは「メトロノームの正確さを持って弾き、ビロードの手袋をはめた鉄の手」[2)]と述べている。

フォーレの創作の第2期と呼ばれるのは40歳の時からである。父親の死、その2年後

には母親が亡くなり、彼の感性にも大きな影響を与えその音楽は瞑想と悲しみの時代となる。それは名曲「レクイエム」によって明らかになる。自身の言葉によれば「それは苦しみというよりもむしろ永遠の至福の喜びに満ちた解放感に他ならない。」[3)]と語っている。

その後、名曲「ノクターン第６番」「舟歌第５番」「主題と変奏」等のピアノ曲が作られた。

50歳を過ぎた頃パリ音楽院の作曲の教授になり、教育者としてのフォーレはラヴェル等の高名な作曲家を輩出した。ラヴェルは「フォーレからは有意義な助言と励ましを受けることが出来た。」[4)]と述べている。

前述の1905年に起きたラヴェル事件の後、パリ音楽院の学長となり一躍世間に名声を広めた。

晩年70歳以降の総ての作品はフランス音楽の傑作に数えられる。

その美しく流れるような旋律、軽妙なリズム、色彩感溢れる洗練された和声は聴くものを魅了する。フォーレの音楽は交響曲等が無く、比較的規模の小さい作品が多い為かサロン音楽として位置づけられ現在まで受け継がれているが、しかしこれはフォーレの評価を下げるものではなく、ノクターンのメロディの美しさ、ワルツカプリスのリズミックな流れ、緻密な構成力まで素晴らしいものがある。

作品は管弦楽曲、協奏曲、室内楽曲、ヴァイオリンソナタ、チェロソナタ、歌曲、オペラ、レクイエム等。

ピアノ曲は主題と変奏、組曲ドリー、ワルツカプリス、ノクターン、アンプロムチュ、バルカローレ、プレリュード等、美しく流麗な作品が多い。

チャイコフスキー

次にロシアの作曲家について記したいと思う。広大なロシアからは優れた数多くの音楽家が輩出された。その中で、代表的な作曲家といえばピョートル・イリイチ・チャイコフスキー Pyotr Ilyichi Tchaikovsky（1840～1893）の名を挙げることになろう。

父親は鉱山技師でその次男として生まれ、少年の頃はサンクトペテルブルクの法律学校で法律を学び、卒業した後は法務省に勤めたが仕事には熱心ではなかった。

20歳を過ぎた頃、当時初めてのロシア人ピアニストであったアントン・ルビンシュタインが設立したペテルブルク音楽院に入学し、その後法務省の仕事を辞してしまう。

音楽院を卒業してからアントン・ルビンシュタインの弟、ニコライ・ルビンシュタインが設立したモスクワ音楽院の講師として、10年以上教鞭を取った。

1875年チャイコフスキーが34歳の時、演奏不可能と言われた彼の名曲、ピアノ協奏曲第１番が、ハンス・フォン・ビュローによる初演で行われ、大成功を収めた。

翌年から、大富豪の未亡人フォン・メックから10年以上に渡って、経済的援助を受ける。しかしながら、チャイコフスキーは夫人と一度も会うことはなく、多くの手紙で文通

をしていた。

その後、メック夫人のお抱えピアニストとなったのが、若き日のドビュッシーである。チャイコフスキーの代表的な作品は、三大バレエ組曲「白鳥の湖」「眠れる森の美女」「くるみ割り人形」がある。

私も２台ピアノで「眠れる森の美女」、連弾で「くるみ割り人形」を数回演奏したが、一度聴いたら忘れ難い美しいメロディー、スタッカートの連打の絶妙なリズム、標題を持つメルヘンチックな内容と技術的な難しさもさることながら、その音楽の素晴らしさは聴くものを虜にする。

また、４年おきに開かれるチャイコフスキー国際コンクールは世界的権威を持ち、世界３大コンクールの一つに数えられる。

作品は「悲愴」を含む６つの交響曲、管弦楽曲、序曲、前述の３大バレエ組曲、協奏曲、室内楽曲、オペラ、合唱曲、歌曲など、ピアノ曲は数多くはないが、２つのソナタ、四季、ドゥムカ、小品集、子供の為のアルバム等があり、四季の中の４月の松雪草、６月の舟歌、11月のトロイカ等小品ではあるが、繊細な素晴らしい名曲である。

ラフマニノフ

次にロシアの作曲家の名を挙げるとすれば、ピアニストにとって重要な作曲家の一人であるセルゲイ・ヴァシリエヴィチ・ラフマニノフ Sergei Rachmaninov（1873～1943）の名を挙げることが出来るだろう。

ラフマニノフは裕福な貴族の家系に生まれた。しかしラフマニノフが９歳の頃一家は没落し、父親は家族を捨て母親が才能のあったラフマニノフをペテルブルク音楽院に入学させた。

後にラフマニノフはモスクワ音楽院に転入し、18歳で同期のスクリャービンと共に金メダルで卒業した。

1897年、ラフマニノフが24歳の時初演した交響曲第１番が失敗に終わり、自信を失い神経症となり、一時期創作出来ない状態に陥った。しかしその後、精神科医に治療を受け立ち直り、かの名曲ピアノ協奏曲第２番を作曲し本人の演奏で初演され大成功を収め、作曲家としての地位を確立した。

40歳を過ぎた頃、革命が起こりロシアの地を離れ二度と祖国の地を踏むことはなかった。その後アメリカに渡り、コンサートピアニストとして多忙な演奏活動を行い、ヨーロッパと行き来し活躍した。

ラフマニノフの演奏で注意したいのは、まず身体的特徴として身長が２ｍ近くあったことである。従って彼の手も非常に大きく12度が届いたという。私もラフマニノフの曲に憧れ数回挑んだことがあるが、手を痛めてしまい、彼の曲を弾くのは手が強く、そして大きい人に限られることを実感した。

ラフマニノフは作曲家として素晴らしい作品を数多く残しながら、ピアニストとして多忙な演奏活動を行い、その自作自演を始めとした多くのレコーディングが残されていることが功績の一つでもある。

モスクワ音楽院を首席で卒業しただけに、そのヴィルトオーゾ的な輝かしい演奏は叙情的な旋律、強靭なテクニック、重厚な響きで聞く者をその世界に引き込み我々を魅了する。

自作の数々の作品は無論、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、ショパン、リスト、メンデルスゾーン、シューベルト、シューマンと多彩なレパートリーを持ち、現代でそれらをCDで聞くことが出来るのは我々にとって大きな喜びである。

主な作品は3つの交響曲、4つのピアノ協奏曲、室内楽曲、声楽曲、オペラ、合唱曲等。

ピアノ曲は2つのソナタ、前奏曲集、練習曲集、音の絵、楽興の時、二台のピアノの為の組曲、小品集他、技術的にどの曲も非常に難易度が高いが心に残る作品が多い。

プロコフィエフ

次に、ロシアの作曲家でピアニストとして重要な作曲家はセルゲイ・セルゲーエヴィチ・プロコフィエフ Sergei Sergeevich Prokofiev（1891～1953）を欠くことはできないだろう。

プロコフィエフは5歳で作曲を始め、9歳でオペラを、11歳で交響曲を作曲しその才能ぶりを発揮した。13歳でサンクト・ペテルブルク音楽院に入学し、作曲、ピアノ、指揮を学んだ。18歳でピアノソナタ第1番を、その3年後にはピアノ協奏曲第1番を作曲し、自身のピアノで演奏した。

23歳でルビンシュタイン賞を受賞し、優秀な成績でピアノ科と作曲科を卒業した。その後プロコフィエフの名声は一段と高まったがその独特な作品はいつも批評家たちの激しい議論の的となった。

27歳の時ロシアに革命が起き、日本を経由しアメリカに渡った。その時日本には約2か月間滞在し、その間東京、横浜、京都、奈良、大阪、箱根などを訪れ、東京、横浜ではピアノリサイタルを行い、日本の音楽界に大きな影響を与えた。

アメリカでは当初芸術の革命家と評され、ピアニストとしては認められたが作曲家としての彼の音楽は受け入れられなかった。しかし、その後行われたアメリカ公演、4年後に行われた公演共に成功を収めた。後にアメリカからフランス、ドイツ等に行き20年近くピアニスト、作曲家として活躍したが、一時ロシアに帰国したのを機に正式に帰国する。

47歳の時、最後の海外演奏旅行でフランス、イギリス、アメリカ等を訪れ大成功を収めた。

帰国してから何年か過ぎた後第二次世界大戦が起き、この間ピアノ曲で有名な3曲のソ

ナタ第６、７、８番（通称、戦争ソナタ）が書かれた。

晩年、プロコフィエフはジダーノフ批判の対象となった。ジダーノフ批判とは、主にショスタコーヴィチの戦争に反対する作風を批判し、スターリン体制の元、ソ連共産党中央委員会のジダーノフがこれを利用し、前衛芸術家を批判し、主にショスタコーヴィチ、プロコフィエフ、ハチャトリアンらに自己批判を求めたものである。

50歳を過ぎた頃、事故で頭部を負傷し徐々に衰弱していく中で、驚異的な力で作曲を続け、数多くの曲を残した。

作品は７つの交響曲、オペラ、バレエ音楽、映画音楽、管弦楽曲、協奏曲、室内楽曲、合唱曲、歌曲と多彩なジャンルに渡り、ピアノ曲は５つの協奏曲、前述の３曲の通称戦争ソナタを含む９つのピアノソナタ、４つの練習曲、トッカータ、小品集、束の間の幻影、といずれも独創的で力強く、躍動感あふれるリズミックな曲が多い。

スクリャービン

最後にもう一人、ピアニストとしてロシアの重要な作曲家を挙げるとすればアレクサンドル・ニコライエヴィチ・スクリャービン Alexander Nikolayevitch Scriabin（1872～1915）の名が挙げられると思う。

貴族の家系に生まれたスクリャービンの母親は、モスクワ音楽院を卒業した優秀なピアニストだったが、スクリャービンが生まれて間もなく亡くなってしまい叔母に育てられた。虚弱な体質であったにもかかわらず少年期には陸軍士官学校に入学したが、音楽の才能が認められ、17歳の頃モスクワ音楽院に入学した。

同期にはラフマニノフがおり、卒業時にはラフマニノフが大金賞でスクリャービンが金賞であった。しかし無理な練習の為か右手首を痛め、ピアニストを諦め作曲家になることを決意した。

その後、優れたロシア人作曲家を手助けする材木商ベリャーエフから10年間資金援助を受けた。

26歳の時モスクワ音楽院のピアノ科の教授に就任したが、作曲に専念する為、数年後その職を辞した。

30代半ばにアメリカ公演に行きリサイタルや協奏曲を演奏し、その後パリのオペラ座で行われたロシア・シーズンでピアノ曲や協奏曲、交響曲等が演奏された。

子供の頃からショパンやリストに親しんでいた為か、美しい旋律と和声でロシアのショパンとも言われた。作風の特徴としては30歳を過ぎてから出会った神智学の影響を大きく受け、哲学や神秘思想への系統を強め、神秘の和音を創作し、独自の語法を作り上げた。スクリャービンの神秘和音は伝統的な和声の基礎をなす３度の集積ではなく４度の集積に基づく和声法であり、1910年前後から、彼の作品はすべて次の和弦 **譜例(4)** から成り立っている[5)]。

作品は４番の「法悦の詩」を含む５つの交響曲があるが、自身が優れたピアニストであっただけにピアノ曲が多数を占め、７番「白ミサ」、９番「黒ミサ」を含む10のソナタ、協奏曲、幻想曲、ポロネーズ、ワルツ、スケルツォ、マズルカ、前奏曲、即興曲、練習曲、小品集等がある。

引用文献

１）属啓成著『ハイリゲンシュタットの遺書』音楽之友社　東京　1981年　p. 11

２), ３), ４）ジャン＝ミシェル・ネクトゥー著　大谷千正編訳『ガブリエル・フォーレ』新評論　東京　1990年　p. 74, 83, 128

５）ウィリ・アーペル著　服部幸三訳『ピアノ音楽史』音楽之友社　東京　1973年　p. 242

参考文献

『西洋音楽史　印象派以後』柴田南雄著　音楽之友社　1967年

『新音楽史』K. M. ミラー著　村井範子　松前紀男　佐藤馨　秋岡陽　共訳　東海大学出版会　2000年

『新西洋音楽史中・下』D. J. グラウト／C. U. パリスカ著　戸口幸策　津上英輔　寺西基之　共訳　音楽之友社　2001年

『バッハの生涯と芸術』属啓成著　千代田書房　1968年

『モーツァルトの手紙上・下』柴田治三郎編訳　岩波文庫　1980年

『モーツァルト〈1〉生涯編』属啓成著　音楽之友社　1976年

『ベートーヴェン　全ピアノ作品の正しい奏法』カール・ツェルニー著　パウル・パドゥラ・スコダ編　古荘隆保訳　全音楽譜出版社　1963年

『ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン，ハイリゲンシュタットの遺書』解説＝グスターフ・ヴァール　翻訳＝属啓成　音楽之友社　1981年

『ベートーヴェンの日記』メイナード・ソロモン編　岩波書店　2001年

『ピアニスト・ショパン上・下巻』ウィリアム・マトウッド著　横溝亮一訳　東京音楽社　1991年

『リスト　生涯編』属啓成著　音楽之友社　1991年

『ロベルト・シューマン』ウード・ラオホフライシュ著　井上節子訳　音楽之友社　1995年

『ブラームス』ハンス・A・ノインツィヒ著　山地良造訳　音楽之友社　1994年

『ドビュッシーとピアノ曲』マルグリット・ロン著　室淳介訳　音楽之友社　1976年

『ラヴェル　生涯と作品』ロジャー・ニマルス著　渋谷和邦訳　泰流社　1996年

『ガブリエル・フォーレ』ジャン＝ミシェル・ネクトゥー著　大谷千正編訳　新評論　1990年

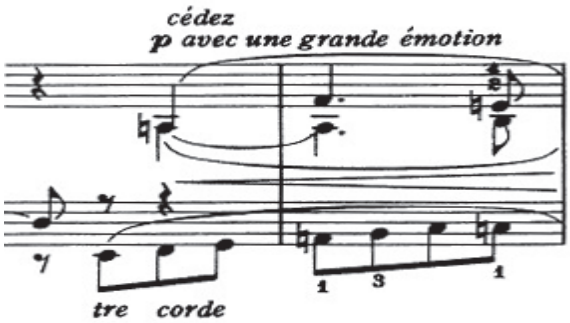
『作曲家ダイジェスト　ラフマニノフ』柴辻純子　堀内みさ著　学研　2010年

『モスクワの憂鬱　スクリャービンとラフマニノフ』藤野幸雄著　彩流社　1996年

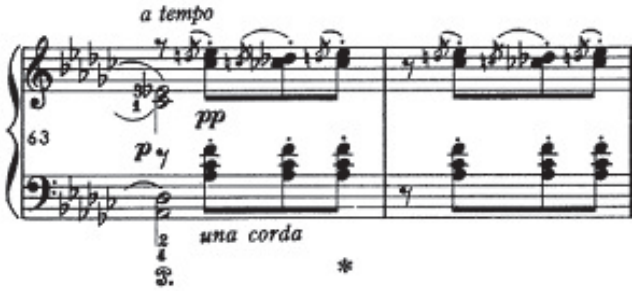
『プロコフィエフ　その作品と生涯』サフキーナ著　広瀬信雄訳　新読書社　1995年

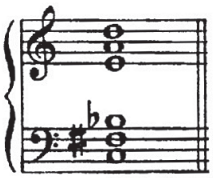
画像

譜例(1)



譜例(2)



譜例(3)

譜例(4)